授与され、皆で分けてのみました。

さて、東京を出て、郡山、会津若松と帰り、喜多方駅の近くの親族の家で食事をしました。外米とは違い内地米は油こい味がして、副食物なしでも十分の感じでした。

留守宅では父は在郷軍人会の会長をしていた。私の無事帰国の喜びをおさえ気味にして幸福をかみしめていた。

家には大和毛織会社の従業員の人が六人いた。疎開で東京から来ていて、年末までには皆、東京へ戻って行った。

復員後、昭和二十一年十二月十五日、結婚した。現在、女・男・男と三人の子供、八人の孫、妻と皆元気で暮らしています。

最後に南シナ海方面での私の戦場経験を振り返って見ると、天佑というか、武運長久というか、とにかく怪我一つなしに五体満足に復員して、戦後の平和な毎日に恵まれて一族が安楽に生活をしています。

幾十万、幾百万の英霊のお陰様と感謝してもしきれない気持ちでいっぱいです。また生ある限り死ぬまで、祖国のため、孫や子の安楽のため、正々堂々と生き抜いて行きます。

散った桜に散る桜
残る桜も散る桜

石川県　榊田弘明

父は私が十五歳の時に死亡、長兄は軍隊へ行って、姉五人、妹一人、私は次男、家族で親を助けていた自作農であったが、兄は内地で教育係をしていたが、昭和十七（一九四二）年に除隊して帰宅した。

その昭和十七年には、私は徴用に取られるので予科練を志願した。家業は、帰ってきた兄や姉がやってくれていた。第二次試験は（石川県で二十

人余り）合格した。第二次試験は舞鶴栗田飛行場、舟艇の基地、天の橋立の裏側である。

そこで三日間、学科、身体検査をびっしりやられた。最後に血圧が低いので飛行隊は駄目だということで、「来年（昭和十八年）五月、舞鶴海兵団に入隊するよう」に、そして、電信か信号の方を受けさせられた。そのため、海兵団では信号を志願し受験し、四倍の競争率を突破し入団した。

その時点でモールス信号を覚えておけと言われていたので、東京の中野無線学校の講義録を取り寄せ入隊するまで勉強をした。それが入隊してから役にたった。実家は、母、兄、姉妹が自作農で頑張っていた。

海兵団へは、昭和十八年五月一日入団、二ヵ月間で、信号・電信は覚えて、学校へ行くことになった。気流の旗六十旗、モールスを完全に頭に入れた。モールスは他の者より飛び切り上成績であった。

海兵団での信号二ヵ月、他の人より早く、専門教育を受けるため、横須賀の航海学校へ入学した。学校へは六ヵ月、十二月に卒業をした。その間は苦労した。班長係をしていたから「学校の成績が今後を左右するから」と、ハッパをかけられ、信号は一時間授業を受け、直ちに試験、採点して成績が悪いと罰則があるので、皆苦労をした。

毎日の成績はグラフで表す。これが班の成績になるのだから、自分一人だけが良くても駄目、そこに海軍の連帯がある。

学校では、その他、見張り、ラッパ、気象学の教育を受けた。ラッパは呼吸が長くないと駄目である。

教育が終了し、お陰で成績は良く、巡洋艦乗組みとなり、三人の責任者となり、瀬戸内海にある呉の桂島へ行った。戦艦「伊勢」を二日間見学し、教育を受け、二十人が新造駆逐艦の旗艦司令少佐の指揮下に入った。

これから、飛行機との信号とか、モールスの実戦教育を受けた。駆逐艦の乗組員は三百五十人位で、その内、呉の桂島で訓練を受けた。

二月、播磨造船所ドックで水中聴音器をつけ、教育を受けた。昭和十九年三月七日頃、南方へゆく船団を組むため横須賀へ行く途中、愛知県沖で台風に遭う。風速四〇～五〇メートルは風に向かって航行するが、うねりが高く、沈没しそうになり、海水が浸水する。甲板のリノリューム全部が剝がれる。一五センチの砲がずれる。

そのため、横須賀で三日間昼夜兼行で直した。トラック島では船団が待っていた。その数は、六〇〇〇トン以上の船が十一～十三隻と、護衛艦十隻位が待機していた。

巡洋艦「龍田」乗組みについて申し述べる。

私が「龍田」に乗艦して二月初め、信号長より「君は、航海長、今泉理（さとし）大尉の従兵になるように」と命ぜられ「何がなんだか判らないが」と答えると、信号長は「士官従兵の人達がいるから仕事のことを教えるよう」と言われるので、田舎者の私は言葉使いなど内心不安でしたが、海軍では丁寧な言葉使いをして苦労しながらどうにか任務をつとめた。

第十一水雷戦隊司令官木村少将が指揮官となり、旗艦「龍田」以下、駆逐艦「野分」「夕凪」「卯月」、海防艦数隻に輸送船六〇〇〇トン以上十二隻が、十二日未明、木更津を出撃、上空から二式の大艇二機が警戒いたしサイパン島に向かった。

南下中、翌十三日三時十三分、八丈島西方で米潜水艦「サンドランス」の雷撃を受ける。司令部は「龍田」の被雷後、駆逐艦「野分」に将官旗を移し、その後、十九日無事にサイパン島に着けたのである。

我々の船団には、二隻の艦が護衛に来てくれた。そしてトラック島へ行く。三月十三日午前三時十三分、自分の乗った巡洋艦「龍田」が雷撃を

受けた。私は当直済み交替で、二時に部屋に入って寝たが、床からにじり落ちた。ブザーが鳴る。電気は消える。我が魚雷発射管に敵の魚雷が当たった。真中が海へ飛んで行った。艦はその時沈まなかったが、曳航して半日後沈没した。艦は平衡を保つよう努力したが、段々と沈没していった。時間は十五時ころであった。

司令部の主力は曳航する駆逐艦に行ったが、取り残された我々は、どうなるかと思った。島は見えなくなる。段々と沈んでいる。しかし信号は艦長と一緒に居なければならず「総員退避」の命令が出るまで信号の任務を遂行しなければならない。

艦体は傾いて「もう駄目だ」と思い、故郷や母のことも思っていた。その時、艦は静かに沈んでいったので、我々は巻き込まれないで済んだ。

艦首の鎖の菊の紋章の真上に、水雷長が最後まで残って「万歳！」をされていた。あの時の光景は未だに眼底に刻まれていて忘れられない。我々は浮いている角材につかまって、「海行かば」の大合唱をした。

士官の人は「お前達、上も下もない。お互いに、眠気が来たら、お互いに叩いて励まし合え」と言われたことが忘れられない。

潮の流れるままに、時には海水が耳に入り、お互いに故郷を思いながら泳いでいた。海防艦や駆逐艦が助けに来てくれたが、沈没してから既に三時間位かかっていたように思う。私が気が付いたのは、駆逐艦の機関室で、頬を叩かれ、「ホッ」と眼が醒め助かった時であった。生きているのだと思ったが、死んだ人のことが気がかりであった。

魚雷が当たった。我が艦の魚雷発射管のそばにいた人など二十余人が戦死した。横須賀の砲術学校に収容されるまで、十日間程隔離された。秘密漏洩上の為か。その後舞鶴の練習艦「東」に二カ月間収容された。私は「信号」だから、皆より早く舞鶴鎮守府に帰った。

私は初陣が乗艦の沈没でしたので、今でも戦友会で、毎年話題になります。その後、防備隊付属の駆潜艇（約四〇〇トン）等に乗り、主に日本海の警備・護衛の任についたのである。当時既に、本土防衛が重要な課題となり、昭和十九年後半からは、本土防衛が主任務になり、内地及び近海でも、戦地外戦務ということが恩給上からも新加算ができるようになった。

私は、昭和十九年六月～七月、四〇〇トン級の駆潜艇に乗り、南方スマトラに行くことになったが、歯の病のため腔内が痛み、顔が腫れ、南方、スマトラ行きが中止となり退艦をした。ところが、先に行った者は戦死した。私はこの時に好運にも死なずに済んだのだ。

歯が直り、第三十五掃海隊に転属、佐世保基地、沖縄（長崎・鹿児島）、台湾・基隆での勤務となり、任務は商船の護衛専門となった。

昭和十九年十月十日、沖縄戦では大空襲があり、私は港に居て、魚雷、潜水艦の発見等が主たる任務であった。駆潜艇は四〇〇トン、二七ノットである。しかし敵潜艦に爆雷を投下して早く離れねば、自分の爆雷で自爆してしまうから、ノンビリしてはいられない。

要は、潜水艦、飛行機を早く見付けることであって、機敏に動作しなければ自爆となる。新入者・未体験者にはこのことはとくによく教育しないと自爆となってしまう。

昭和二十年正月、沖縄から台湾へ、自分の故郷である金沢の第九師団の輸送の護衛をした。我が艦は水中聴音器をつけていたので損害も少なく任務を完うした。

私は眼が良かったので、敵空襲機は勿論のこと、魚雷の航跡も早く発見でき、監視の任を完うすることができたと思う。

正月米軍の爆撃があったが、我が軍の損害は無かった。第二回の空襲の時は「第四十二海防艦」

は基隆空襲直後だったか、火柱を立てて轟沈した。米潜水艦のレーダーは優秀であり、その上B29の攻撃、そのため駆潜艇二隻がやられた。

昭和二十年三月、沖縄大空襲があり、その時は那覇の港に居て、B24に発見された。このときは午前五時に空襲があり、また、午後三時過ぎ空襲があった。敵機は飛行場を叩いて、さらに周囲の砲台や防空隊を叩いて、艦船にも向かって来る。機上の米兵の顔が見えるような低空で攻撃し、彼らは平然としている。そして、撃墜された飛行士を助けに来る態勢までとっている。

我が軍の艦長は、商船学校出身の予備将校だが大胆な人だった。艇員は四十人位で、上も下も無い人間関係だったので良い環境ができていた。

奄美大島へ行って古仁屋の反対側に防備隊があり、そこへ物資を運んだが、その時にもB24に見付けられた。その時は早朝で、荷を降ろし退避をした。朝、鹿児島へ行った時「児童の乗った船が沈められたので、警戒を厳にせよ」の通知があった。

「第十五掃海艇」から信号が上がったので、二〇センチの眼鏡で見たら、後部に敵の魚雷の攻撃を受け、積んだ爆雷に当たって破裂し、後部は取れてしまった。しかし、ハッチを閉めたら沈まず済んだ。

護衛船が港へ乗り上げ、その間、潜水艇の見張りをしていたら、後部には当たらず済んだので鹿児島へ帰った。「早く見付けてくれ、お陰で」と、船長から褒められた。何秒の差、一瞬の差で難を遁れた。

沖縄の玉砕以後は、その方面には行けなくなり、大島へ物資を持っていった。その後は近海奄美の警備で戦闘配置の日々が続いた。

「第十五掃海艇」が雷撃され、諏訪瀬島へのし上げ、私の艇だけが警戒に当たり「第十五掃海艇」の物資を陸揚げしている折、見張を厳にして見張りをしていた時「右三・四〇度より魚雷！」

と私が叫んだ。

艇は仮泊しているので、艇長は機関室へ「前進全速左舷（トリカジ）いっぱい！」と大きな声で伝送管より「強くいっぱい！」と言われると、艇が動き出したところ、後部（トモ）すれすれに、薄樺色の魚雷が来た。私達は「これで最後」と、手を合わせ合掌した。魚雷は陸岸に当たり大爆発を起こし、また命拾いをした。艇長より「早く発見して艇を守ってくれた」とお褒めの言葉を頂いた。

この出来事を船団へ無線で連絡すると、「すぐ返るように」との命令を受け、全速にて鹿児島港に無事帰投した。数日後、佐世保に帰りドックに入渠（にゅうきょ）し休養の半舷上陸があり嬉野温泉へ外泊した。一航海・一航海毎に、これが最後と思い、皆で楽しい一日を送ることができた。

また、明日から頑張らねばと、入渠時の赤本の訂正等で新造艦、艇、沈没の艦艇及び機密信号の訂正等大変忙しい毎日を過ごし、また上官より、いろいろと航海図の航路の入れ方、また何度、何ノットの早さで、ある港までの日数、時間がかかるか、とむずかしく算数の出し方等、教えて頂くも思うようにはいかない。三月に私の下に、信号兼気象員が入ってきたので、私も少し楽になった。三月二十六日、米軍が慶良間諸島（船団がよく仮泊地としていた所であり、各島に囲まれ外部より余り見えない所であった）に上陸した。

米軍は四月一日には、沖縄本島に上陸し、それから毎日が空襲の連続で、九州近海、山川・天草・長崎・五島列島等の警備、船団護衛を行った。男女群島にては艇に網を張り、木の枝・草等にて偽装するも、敵に発見され、戦闘が度々あった。夕方より沖縄方面に急航、近海の気象観測をし、鹿の屋の特攻基地に知らせる任務についた。近海の敵潜水艦の出没が多くなり、現場へ急航することが多くなった。

七月の初め頃より、日本海にも敵潜水艦が出没

するということになり、舞鶴に帰投せよとの命を受け、舞鶴港外及び若狭方面の警備にしばらくあたったが、敵潜は見当たらず、防備隊は久しぶりに入港した。そして一晩の休暇ができて、これが最後と思い故郷に急いだ。

家には母・姉・妹、三人がびっくりして、「どこから帰ったか」と言われ「舞鶴より」と答え、早速仏壇に灯明をつけ亡き父に報告をした。また、神社に参り役場・小学校に挨拶に行く。校庭には「さつまいも」が植えてあるのでびっくりした。内地も食糧事情が悪いのだと思った。

十一日夜、汽車に乗り、敦賀の一つ手前の新保駅で爆撃に遭った。汽車の廻りは焼夷弾で火の海となり、列車の近くまで焼け、乗客は何することもできない。駅員のなだめにより、乗客は不安に思いながら火の静まるのを待つより仕方なかった。そして憲兵より証明をもらい、早朝、敦賀へと歩き出したが、駅及び市内は焼け野原となり、焼け出された住民を苦しめる空襲の残酷さを痛感したのであった。

小浜線を三駅歩き、やっと汽車に乗ることができ、夕方になってやっと帰艇することができた。家の者や郷里の人達は無事帰艇できることを祈っていたという。

一週間程防備隊にいて、また佐世保へ出撃することになり、舞鶴も最後と思い、防備隊の人達の「帽子振れ」で送られ出撃をした。その後も、東シナ海・黄海・日本近海などの警備にあたる。潜水艇の出没、グラマン機・P51に対する戦闘配備（対空）の毎日であった。

八月六日に大きな爆弾が広島に投下され、広島が全滅したという無線が入り、艇長が全員を集め広島の出来事を話された。このような爆弾が投下された場合、必ず身を隠し爆風（光）に遭わないようにキャンバス等で身を覆うようにと強く言われた。

九日十時、空襲警報があり、戦闘配置につい

た。十一時頃だと思うが、大きな音をたて艇がひどくゆれ、海面がひどく波立った。艇の時計がほとんど止まった。これが、長崎への原爆投下であったのだ。

いつも、あの時長崎に入港していれば、被爆し、全員が戦死したと思う。生きるも死ぬも、本当に紙一重と思わざるを得ない。艇は野母崎港に入り、上陸後、再び男女群島で八月十五日午前まで戦闘配置についた。十二時、重要な放送があると言われたが、雑音にて全然聞き取れなかった。

しかし、通信の方から「日本が負けた」とのことで、とても残念でたまらなかった。司令部より、直ぐ帰るようにとの信号を受信、佐世保港に帰る。直ちに兵器・弾薬を海に捨て機密書類を焼くようにとの命令があった。私達は、赤本数十冊、極秘書類数冊を焼き捨てた。これで赤本ともお別れだと思い、感無量であった。

数日後、舞鶴に帰れとの命を受け、博多にて艇を降り、ここから汽車で行ったが、岩国・徳山間の線路が爆撃にやられ徐行運転で広島の駅に着いたところ、瀬戸内海までさえぎるものもなく、一目で見える。あの時の爆弾でこんなにひどい有様だとはおもいませんでした。

長崎もこのような損害であったろうと驚くばかりであった。また、瀬戸内海に面した大都市がほとんど戦災を受けていたのには驚くばかりであった。無事舞鶴に帰り、しばらく残務整理をし、九月に入って家に帰り現在に至っている。

はや五十数年経ち、龍田会（軍艦「龍田」の戦友会）も二十三回にもなる。毎年元気な姿を見せる者もあり、「また、あの人がお亡くなりになられた」などとの話が尽きない。あの青春を想い「龍田艦」での最後が私の脳裡に焼き付いて離れず、毎年、会合通知が送られてくる度に思い出される。

私達は、あの青春時代の海軍魂を思い浮かべる、そして神仏のお陰でこのように、日本の発展

があり、また戦没者の皆々様が、私達の身代わりになられたことを忘れることはできない。

（合　掌）

散った桜に　散る桜
残る桜も　散る桜

追　憶

愛知県　村田治夫

八十年を遡って話すことは種々ありましたが、苦しかったことは忘れ易く、楽しかったことは頭に残っています。

愛知県津島にて生を受け、祖父母、両親の下に（兄弟）男六人女三人の十三人家族で、私は次男でした。祖先は岐阜県養老の出身で、祖母は九十七歳で他界致しましたが、この祖母に父は背負われて津島に出て来たそうです。当時は私の家族のごとく各家庭は大家族で、子供は五人、六人は普通でした。が、生活は苦しくとも和気藹々の日々で、朝な夕な笑い声の絶えることなく実に頻笑ましい風景でした。現代のような核家族社会が何故できたのか、自由主義が利己主義と化せしためだろうかと老人は考える。

父は当時、毛織物で全国的にその名を覇せていた尾張の西地区（尾西地区）の当時日本では屈指の羊毛織物会社「片岡毛織」に入社して実直に働き、後には非常勤重役の席にも座しました。親父の真面目に働いた賜物で、昭和初期の大恐慌時も、贅沢では無いが、まあ豊かな生活ができました。

父が学校は上級校に進めと申されましたが兄弟の多い大家族です、普通の高等科に進みました。卒業と同時に父の在籍していた片岡毛織に入社して一年間無事に働きましたが勉学の志やみがたく、友人の推薦で日本車輌の労務課の上司に願い、昭和十四（一九三九）年春入社、正社員として働きました。夜間は、県立旧制工業中学校に通